

2-14 学校に向いて話をするには？

学校を訪れて宇宙の話をしたり、工作や観察をしながら体験的に宇宙を伝える活動は、子どもたちにとって貴重な機会となるでしょう。ボランティア活動として学校で天文に関する講演会や工作教室を開きたい場合のポイントをまとめてみました。一般論を並べましたが、世界天文年をひとつのきっかけとして何かを実現してみましょう。

ステップ1 学校との連絡の取り方

学校に何かを提案したりはたらきかけるときは、いきなり学校へ電話したり、メールしたりして返事や対応を求めることはしないほうがよいでしょう。学校の先生は時間に追われ多忙なことがほとんどです。知り合いの先生など“ツテ”をたどるのがよいのですが、最近はPTAや自治会、公民館などが積極的にこのような活動を主催・支援していることもありますから、必ず学校側にはたらきかけなければならない内容かどうかをまずよく考えてみましょう。

提案をまとめて講座の開催を打診する場合には、学校・地域の教育活動を支援する周辺の組織に連絡したり、地元教育委員会に連絡するのがよいでしょう。学校が主催でなくとも、学校を会場に、または学校に通う子どもたちを対象とした企画を身近に実施することができる可能性が高まります。

ステップ2 趣旨を説明する

学校の先生であっても、世界天文年のことを必ずしも知っているとは限りません。企画を持ち込むにあたっては、

- ・ どのような趣旨で
- ・ 子どもたちに何を伝え
- ・ どのような効果があるか

を伝えるように努めましょう。世界天文年の趣旨に沿った活動が、学校や地域にとって、さまざまなメリットがあることを説明するとよいでしょう。また、活動の趣旨を口頭で伝えるだけでなく、わかりやすく紹介するための資料、例えばパンフレットやポスターなどを手作りするのもよいでしょう。

ステップ3 綿密な打ち合わせをする

最も重要なことは、日頃子どもたちと直接接している組織（学校、PTA、自治会など）と綿密な打ち合わせを行っておくことです。現在の学校を取り巻く状況や子どもたちの状況は大変複雑で

す。それぞれのところでケースバイケースで対応しなければならないことが多々ありますので、電話やメールだけで済ませず、しっかりと顔を合わせて打ち合わせを行いましょう。

日時とともに、会場の安全面の確保・確認は大切なポイントです。また、学校（地域）の活動としての協力体制も、とくに夜間の開催の場合には、どのような形態となるか（保護者同伴を参加条件とする、など）も欠かせないポイントです。

残念なことではありますが、昨今の世相を反映して、学校の安全管理や個人情報の管理などデリケートな問題がたくさんあります。しかし、その点に十分配慮した上で、宇宙に触れるよりよい機会を設けることができれば、子どもたちにとって大きな刺激となるでしょう。



科学技術振興機構（JST）の発行する月刊誌「Science Window（サイエンス・ウィンドウ）」は学校の先生や理科教育に携わる方を応援する雑誌で、全国のほとんどの小学校・中学校・高等学校に無料で届いています。2009年1月号は、計14ページの世界天文年特集記事が掲載されています。学校にはこれに同封される形で日食グラスのサンプル1個ずつも配布されています。個人では年間購読のほか個別の号も購入可能です。世界天文年の趣旨や取り組みを説明するのに便利に使える資料です。

『サイエンス・ウィンドウ』のホームページ
<http://sciencewindow.jp/>